

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方気象台

＜噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げ＞

口永良部島では21日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震の多い状態が続いています。

火山活動が高まった状態となっていることから、本日（28日）13時40分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から3（入山規制）に引き上げました。

【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況（表1、図2～7）

口永良部島では21日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しており、本日（28日）も多い状態が続いています。火山活動が高まった状態となっていることから、今後、新岳火口から概ね2kmの範囲及び向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

新岳西側山麓付近の火山性地震や火山性微動は観測されていません。また、これまでの活動と比較して規模の大きな火山性地震についても観測されていません。

16日に実施した赤外熱映像装置による観測では、新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の噴煙や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、少ない状態で推移しています。24日の観測では1日あたり60トンで、21日以降の火山性地震の増加に伴う火山ガス（二酸化硫黄）放出量の増加傾向は認められません。

この火山活動解説資料は福岡管区気象台ホームページ（<https://www.data.jma.go.jp/fukuoka/index.html>）や気象庁ホームページ（https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php）でも閲覧することができます。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警戒等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています。

GNSS 連続観測では、島内の基線の伸びは2020年5月頃から停滞していましたが、一部の基線でわずかな伸びの傾向がみられます。

今のところ、表面現象には大きな変化はありませんが、火山性地震の多い状態が継続しており、警戒が必要です。



図1 口永良部島 警戒が必要な範囲

新岳火口から概ね2kmの範囲（赤線）

表1 口永良部島 火山性地震の日別回数（2021年2月10日～2月28日13時30分速報値）

日付（2月）	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日
地震日別回数	1	2	0	3	5	2	1	3	2	2	5

日付（2月）	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日 13時30分
地震日別回数	19	15	24	24	29	15	15	10

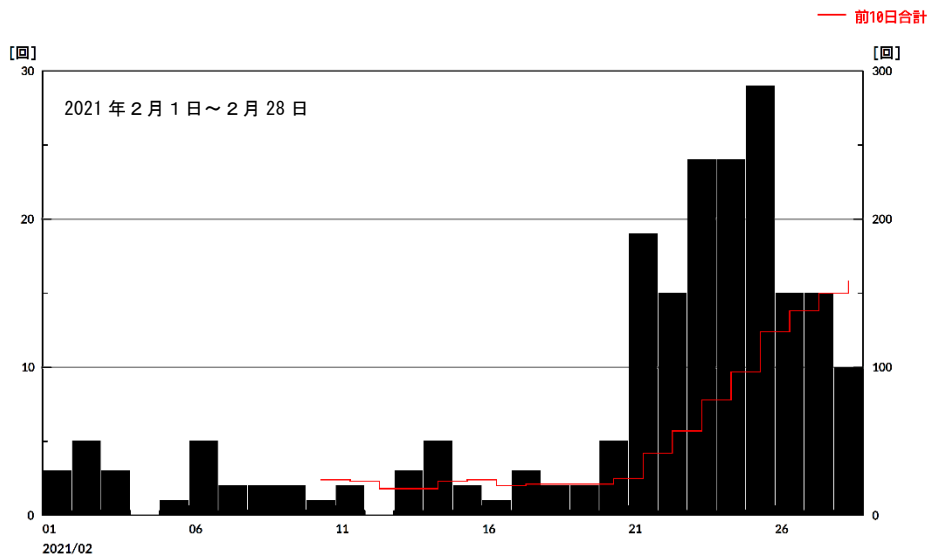


図2 口永良部島 火山性地震の日別地震回数と前10日間の積算回数（2021年2月1日～2月28日13時30分速報値）

21日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しており、本日（28日）も多い状態が続いています。

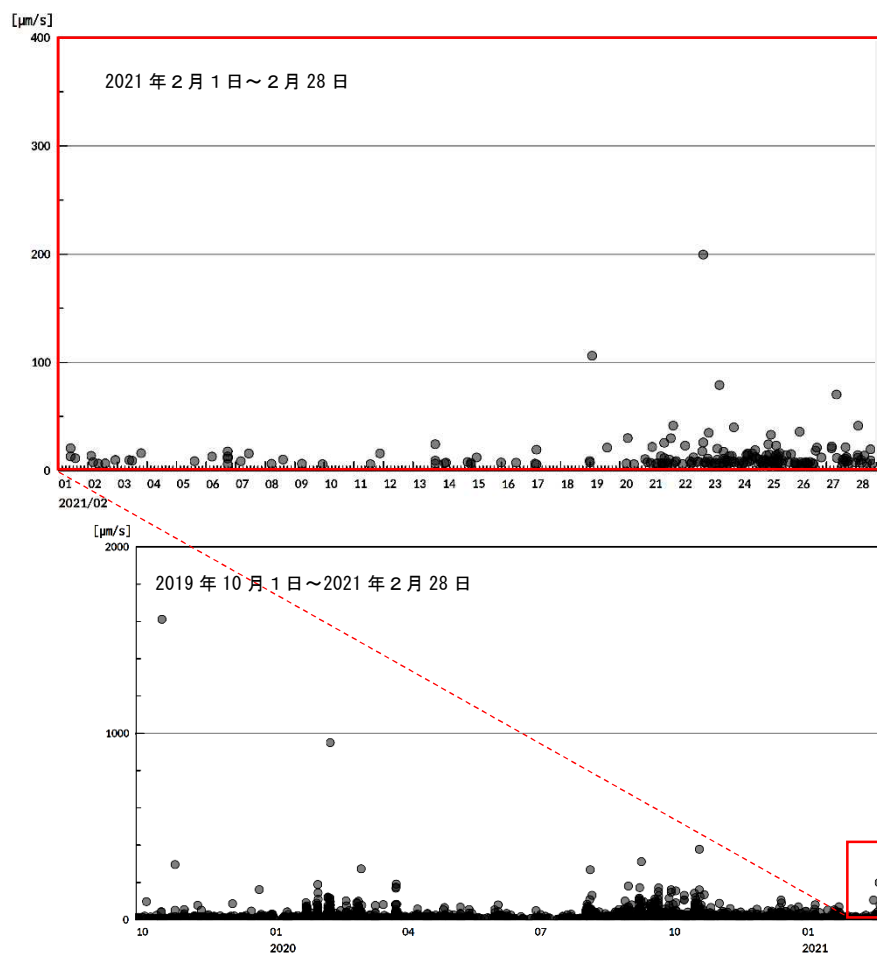


図3 口永良部島 火山性地震の最大振幅（FDKL（京）観測点の上下動、上：2021年2月1日～2月28日13時30分速報値、下：2019年10月1日～2021年2月28日13時30分速報値）

21日以降、これまでの活動と比較して規模の大きな火山性地震は観測されていません。

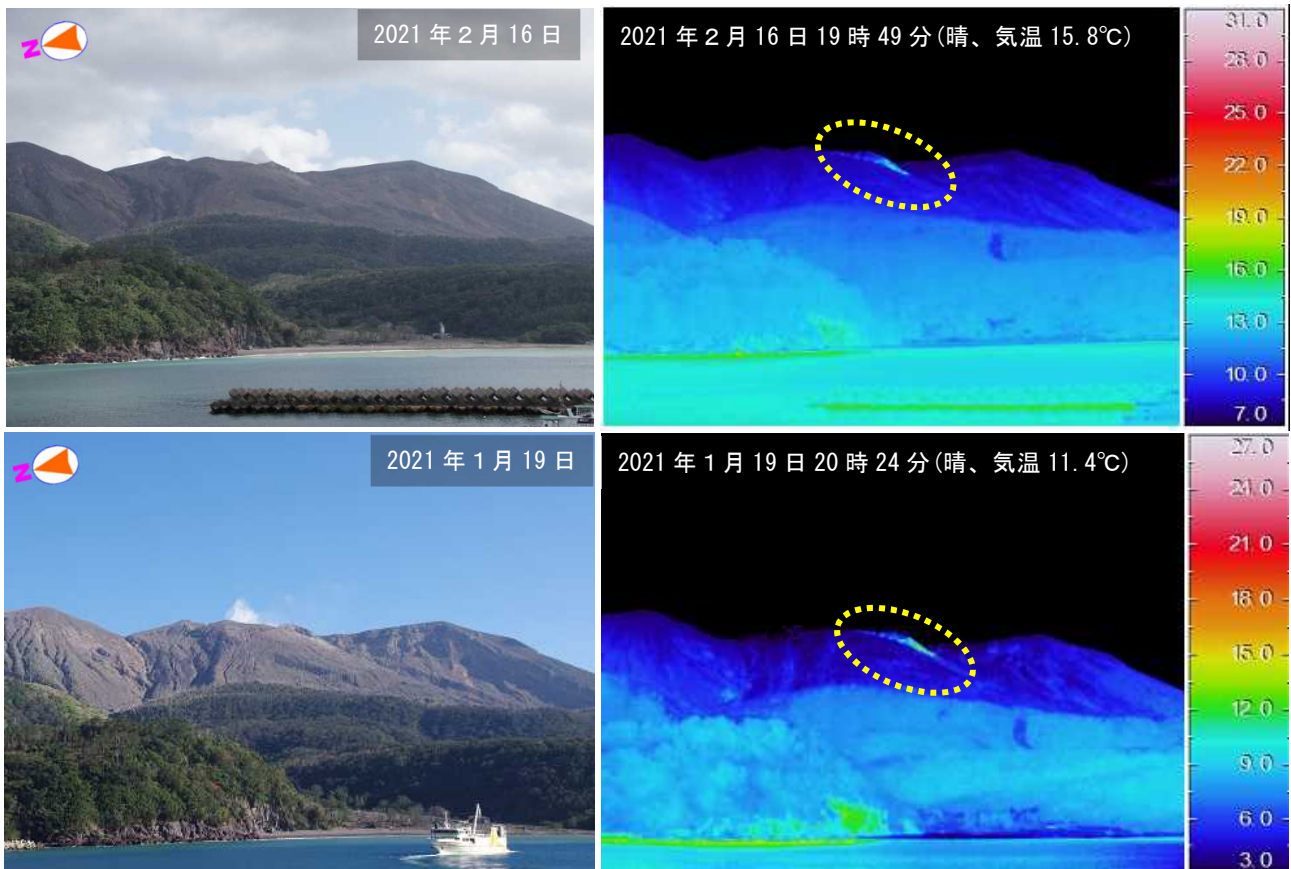


図4-1 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

16日に実施した現地調査では、赤外熱映像装置による観測において、引き続き、新岳火口西側の割れ目付近の地熱域（黄破線内）を確認しました。地熱域の温度と分布には特段の変化は認められません。

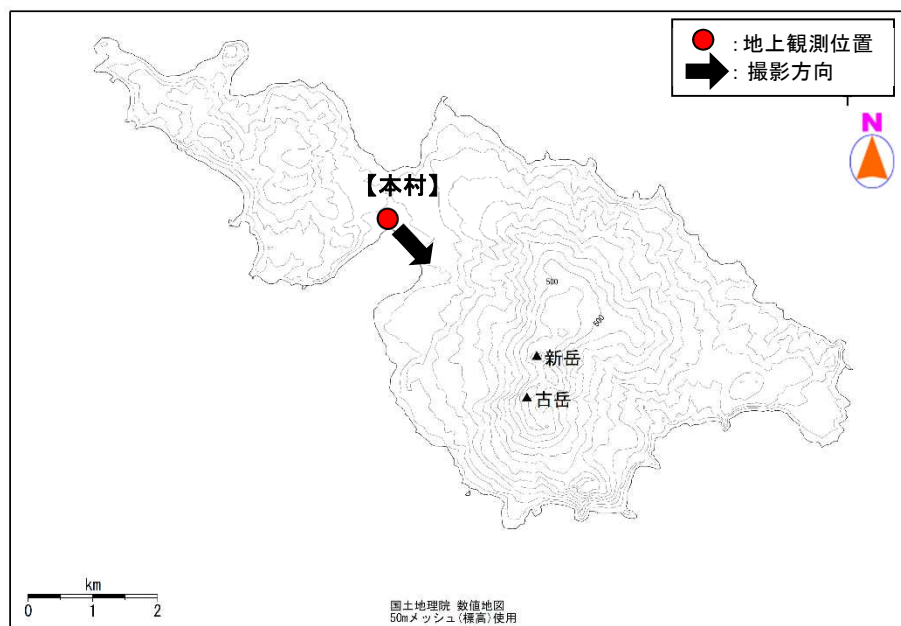


図4-2 口永良部島 現地調査観測位置及び撮影方向

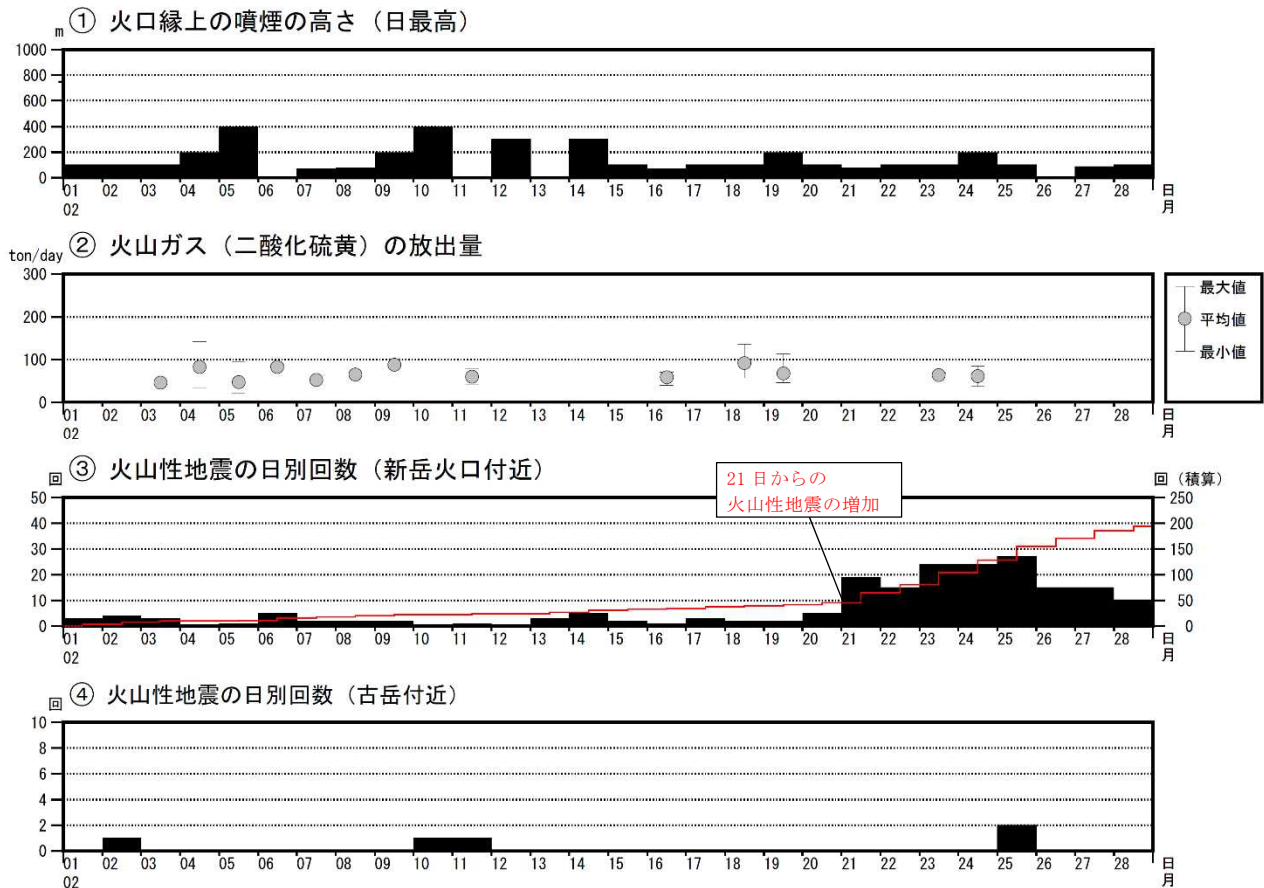


図 5-1 口永良部島 2月の活動経過図（2021年2月1日～2月28日13時30分速報値）

- ・噴火や火映は観測されていません。また、噴煙の状況に特段の変化はありません。
- ・東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、少ない状態で推移しています（24日：1日あたり60トン）。
- ・21日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しており、本日（28日）も多い状態が続いています。

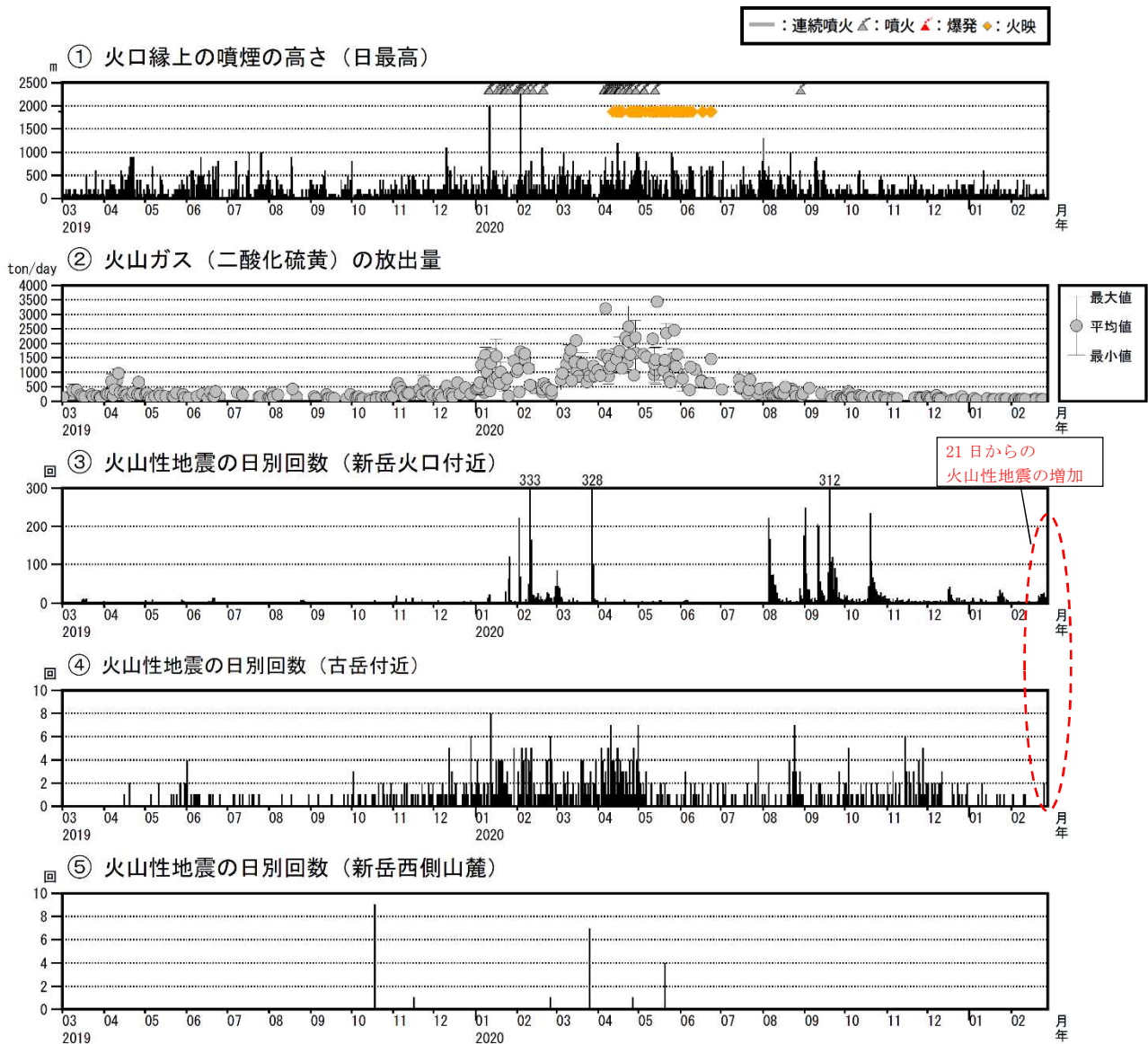


図 5-2 口永良部島 活動経過図（2019 年 3 月～2021 年 2 月 27 日）

- ・ 噴火は 2020 年 8 月 30 日以降観測されていません。
- ・ 火映は 2020 年 6 月 25 日以降観測されていません。
- ・ 東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、少ない状態で推移しています（2021 年 2 月 24 日：1 日あたり 60 トン）。
- ・ 2021 年 2 月 21 日以降、主に新岳火口付近の浅い所が震源と推定される火山性地震が増加しており、本日（28 日）も多い状態が続いています。
- ・ 新岳西側山麓付近の火山性地震は 2020 年 6 月以降、観測されていません。

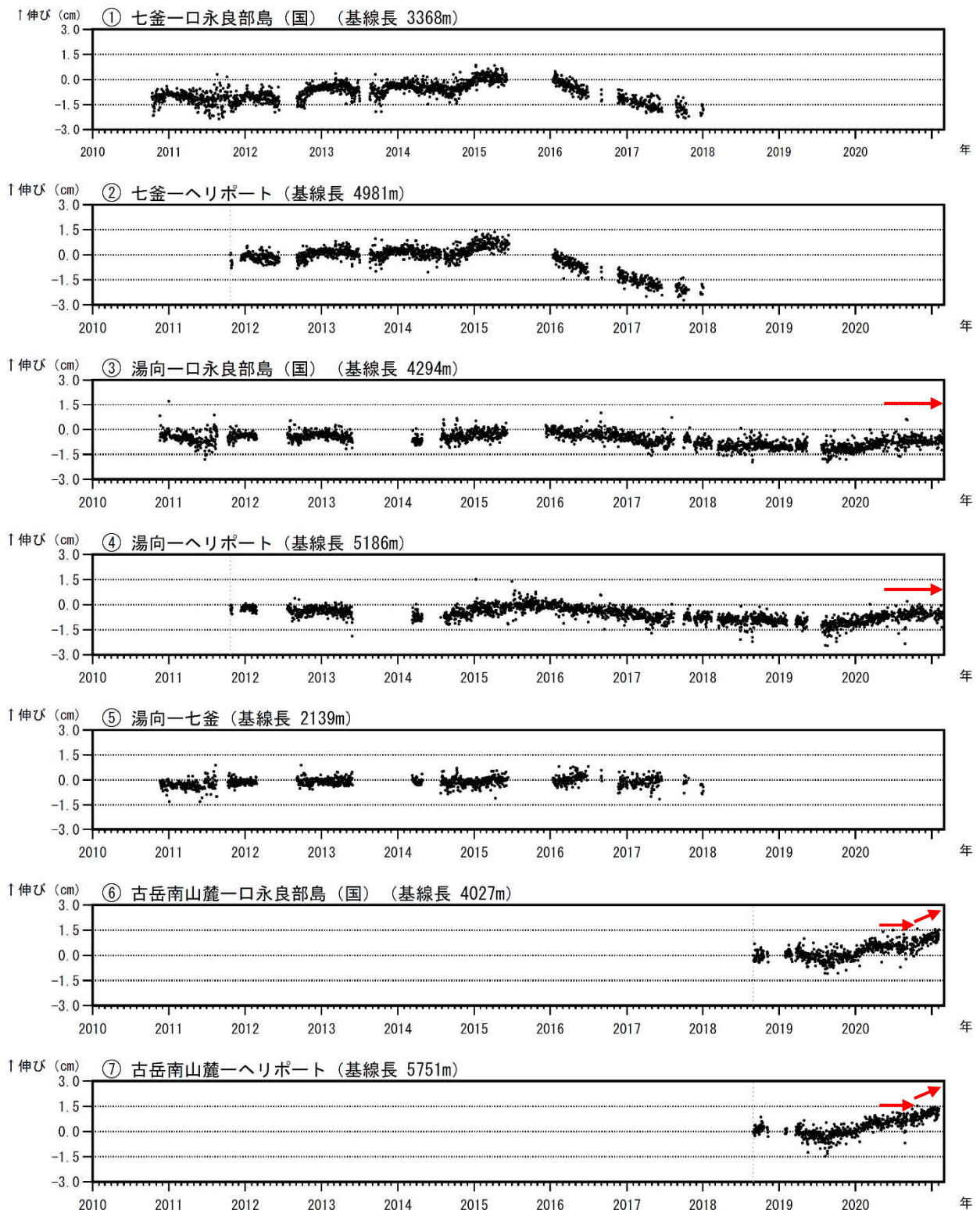


図6 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010年10月～2021年2月27日）

GNSS 連続観測では、島内の基線の伸びは2020年5月頃から停滞していましたが、一部の基線でわずかな伸びの傾向がみられます。

これらの基線は図7の①～⑦に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

（国）：国土地理院

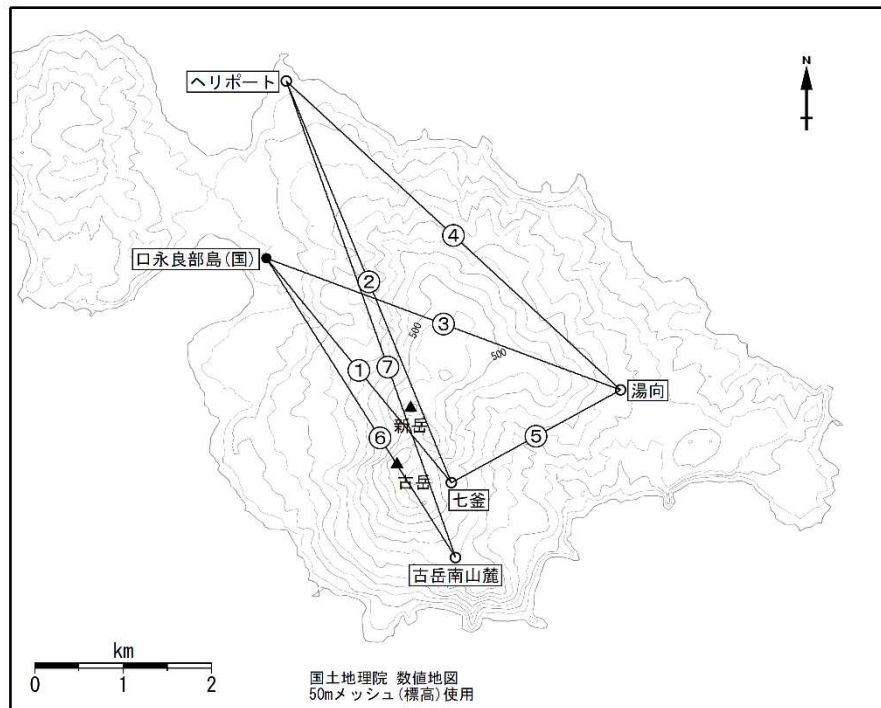


図7 口永良部島 GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院

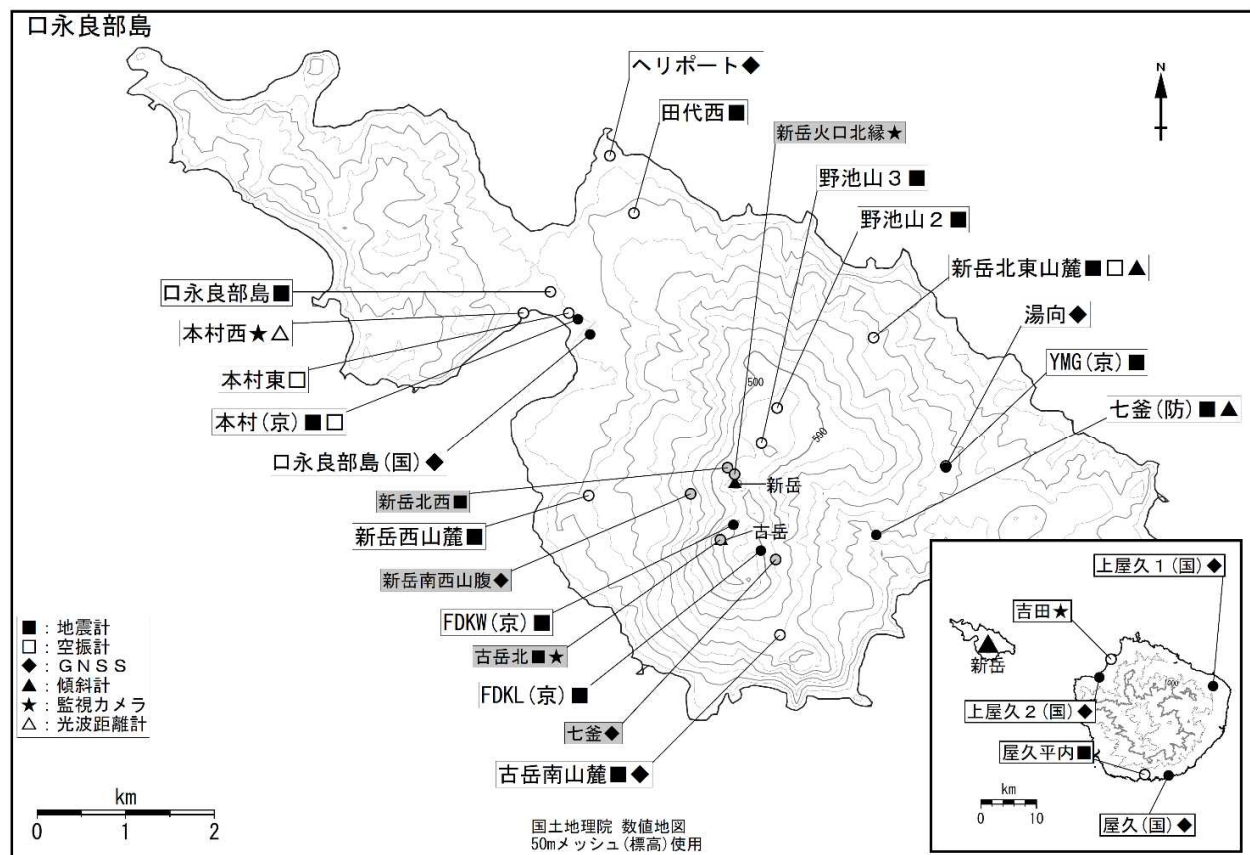


図8 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（京）：京都大学、（防）：防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。